



EAST MEETS WEST COAST

シアトル・カメラクラブ

ピクトリアリズムによるソフトフォーカスな美しさの流行は終わり、アメリカ西海岸で活動していた日系アメリカ人によるカメラクラブの数多くの写真は失われてしまった。だが、ひとりの学芸員の先見の明のおかげで、シアトル・カメラクラブのコレクションは、今日に至るまで保全されることになる。

文 ニコレット・ブロンバーグ

(左)「Portrait of a Tulip (チューリップの肖像)」、エラ・マクブライド、1924年頃。マクブライドは自らの商業写真スタジオを経営し、シアトル・カメラクラブの数人のメンバーを雇用していた。彼女の芸術写真は主に花を題材としている。彼女が102歳で他界した当時、ピクトリアリズムに対する世間の関心が薄かったため、作品のほとんどが失われてしまった。

1920年代のある短い期間、シアトルに住む日系アメリカ人写真家のささやかなグループが、目覚ましい活躍を遂げていた。彼らが好んだピクトリアリズム(絵画主義)というスタイルは、客観的・科学的な表現方法を重視する19世紀の写真に対して生まれたもので、世界的な動向となっていた。芸術としての写真を目指したそれらの作品は、パーソナルで表象的なイメージを生み出し、情感に訴える美しさを漂わせていた。

コダックの小型カメラが登場すると、情熱的なアマチュア写真家たちによる芸術写真への取り組みが始まった。アメリカに移住した日本人たちは、新天地の生活環境や言語習慣に馴染めず、文化的な隔たりを感じていた。しかし、写真への愛好を共有することで、このギャップを埋めることができた。彼らは、

文様の使用、平面的な構成、遠近法の欠如といった日本の美学と、ピクトリアリズムが示す美と感情の表現を融合させた。1920年代になると、日系人の写真家たちは西海岸の各地でカメラクラブの活動を開始した。

シアトル・カメラクラブは1924年に設立され、当初は日系人だけが集う写真家グループだったが、後に日系人以外のメンバーも参加するようになる。メンバーは主にアマチュアの写真愛好者で、大半は本業の仕事を持っていた。例えば、大西秀夫は料理人であり、松本楠寅はドラッグストアで働いていた。クラブ会長の小池恭は医師として医療に従事しながら、写真撮影や俳句を愛好していた。山登りが好きだった彼は、日系商社で働く親友の松下巖と一緒に、レーニア山の撮影に出かけることが多かった。クラブに

は日系人女性の会員や、プロの写真家も何人かいて、國重淺吉(英語名:フランク)とエラ・マクブライドのふたりは、著名な写真家のエドワード・S・カーティスの下で働いていたが、後に独立してマクブライド・スタジオを設立した。同じくプロの写真家のヴェルナ・ハフナー(1928年に参加)や守永ユキオも、このクラブで親交を結んだ。

やがて、クラブのメンバーは世界的に知られるようになる。写真雑誌にも定期的に紹介され、アワードを受賞した作品も数多くあった。そして1926年、シアトル・カメラクラブは「Photo-Era」マガジン・アワードを獲得した。この賞は、1年を通じて同誌主催の月間コンペの受賞数が最も多いカメラクラブに贈られるものだ。さらにこの年、エラ・マクブライドが展覧会への出展数で世界第6位の実績を示して





日系人カメラクラブの記録はほとんど残っておらず、わずかばかりの写真があるだけで、文書は皆無に等しい。そのなかで唯一の例外は、シアトル・カメラクラブだ。

いる。彼女はおそらく、國重らから薫陶を受けており、その作品に見られるシンプルな要素や遠近法の欠如は、多分に日本的だ。1926年3月の「サンセット」誌は「彼女は、一輪の花や単独の小枝に絵画的な芸術性を見出し、出している。シンプルさが彼女のカメラワークを特徴づけているとはいえず、絶妙なフォルムとラインで表現されており、質感や脆さも示している。今日の批評家たちが、彼女の写真を写真界の最先端のフラワーポートレート・アーティストと強調する理由は、この独特のシンプルさなのだ」と評した。

シアトル・カメラクラブの存続中に、参加メンバーたちは一世を風靡する。1928年発行の「American Annual of Photography (アメリカ写真年鑑)」は「日系人の写真家たちについて「この国の写真界に永続的な足跡を残し、その影響は世界中でこだましている」と記録している。小池は、日系人としては唯一、英国王立写真協会に会員として招かれる栄誉を授かった。それ以外のメンバーたちも絶賛の的となり、國重の作品は、あるフランスの批評家から次のように評されている——「彼のプリントワークの前に立つと恍惚感を覚え、暗室の妙法を見ている事実を忘れてしまうだろう。まさに比類なき作品といえる」

PHOTOGRAPHS: RANDALL FAMILY COLLECTION UNIVERSITY OF WASHINGTON



【前見開きページ】
「Autumn Clouds (秋の雲)」、松下藤、年代不明(左)。
「Sunlight in the Morning (朝の日光)」、松木楠真、1929年頃(右)。
【当見開きページ】
(上、左から)「Betti」、國重浅吉(フランク)、1924年頃。無題、守永ユキオ、1925年頃。「Called a Home (ホームと呼ばれて)」、小池恭、1925年頃。

しかし同クラブは、アメリカの大恐慌のあおりを受けて、1929年10月に解散してしまう。皮肉なことに、同クラブが主催したこの年の審査展は、世界最高レベルとしての評価を受けていた。

アメリカ西海岸では、数多くの日系人クラブが成功を収めていたが、数年後には大半の作品が忘れ去られてしまった。後に戦争が始まると、日系人がカメラで撮影することは違法とされた。写真家たちはカメラを手放し、非愛国的と見られることを恐れて、撮影した写真を秘匿し、廃棄してしまった。収容所に強制入所させられている間に、奪われてしまったものもある。戦後も反日感情は続き、過去の撮影歴を口に出せない者もいた。そして、モダニズムが到来すると、ピクトリアリズムは微々たる瓊末なものとして扱われるようになった。

日系人カメラクラブの記録はほとんど残っておらず、特に文書は皆無に等しい。そのなかで唯一の例外が、シアトル・カメラクラブなのである。思いがけない推移を経て、このクラブの写真と文書は保管されていたのだ。戦時中、小池、松下、國重の3人の所持品は、白人の友人たちの手許に預けられていた。1946年にレーニア山でシダを採集中の小池が急死すると、彼の持ち物は親

友の松下に引き渡された。1960年代に松下の妻ハナエと、友人の國重が他界する。数年後、松下は國重の未亡人であったギンと再婚したため、3人の写真家の作品とクラブの保管文書が一堂に寄せ集められた。

松下はワシントン大学に雇われ、日本語を教えることになる。1970年頃、同大学図書館の特別コレクションの責任者であったロバート・モンローが、シアトル・カメラクラブの資料について耳にした。モンローは学芸員としては先進的で、少数民族の写真家の作品や芸術写真を積極的に集めていたのだ。

松下、小池、國重らの1000枚以上の写真や、その他の写真は、図書館に寄付されることになった。また、同クラブの歴史を綴る会報誌「Notai (濃淡)」の全冊も寄贈された(この会報誌で見ることができない数々の作品も掲載されている)。モンローの先見の明のおかげで、数百のネガを含む全作品が救済されることになった。シアトル・カメラクラブが残した業績は、写真史のひとつコマをとらえるスナップショットとして、ワシントン大学図書館に保全されることになったのだ。

◆
オーナー専用サイトの「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」(patck.com/magazine)にて、特別関連コンテンツをご覧ください。